

〔研究論文〕

江戸期の雅楽に関する一考察 —『舞楽留』にみる舞御覧の演奏記録から—

清水 淑子

1. 序

日本音楽史において、江戸期の雅楽は次の引用に代表されるように、「衰退した時代」と一般的にとらえられている。「…略…雅楽の華やかかなりし平安朝時代にくらべれば、雅楽は何といっても萎縮し枯渇していた。…略…」[吉川 1965 : 191]。しかし、江戸期における舞楽の演奏記録をまとめた『舞楽留』に記述された、宮中行事の1つで正月に行われる「舞御覧」の記録をみると、寛文五(1665)年から明治二(1869)年のおよそ200年間に、天皇や上皇が崩御した翌年や舞御覧が行われる内裏が火災で焼失した時以外、ほぼ毎年正月17日(後に19日)に、内裏の紫宸殿の庭において、〈振鉦〉¹⁾と五番あるいは七番、計12～16曲の舞楽を、時には童舞として、京都・南都・天王寺の三方の楽人によって行われていたことがわかる。また別の資料[小野 2000]から、この舞楽が一般に公開されていたとのことである。このように大規模な舞楽を披露する場を200年間続けたという事実から、果たして江戸期の雅楽が衰退した状態だったといえるだろうか。三方の楽人が一堂に会する点においては、明治から現在まで続く宮内庁式部職楽部(以下宮内庁楽部と略す)と似ており、また昭和30年からほぼ毎年春と秋に一般に公開されてきた演奏の場という点においては似ているが、おそらく丸一日9時間近くかかったであろう七番もの舞楽を演奏することが、明治以降にあっただろうか。

以上のことから、本稿では、『舞楽留』における「舞御覧」の記述から、江戸期の雅楽についての実態を明らかにし、江戸期の雅楽が衰退したものではなく、新たな展開を遂げたものであったことを示したい。

研究方法としては、4段階に分けて調査を行い、以下、各章ではその調査結果を示すこととする。まず第2章では『舞楽留』という史料について、第3章では舞御覧の『楽家録』における記述内容と、『舞楽留』について言及した先行研究について、第4章では『舞楽留』から読み取れる舞御覧における全体像について、第5章では舞御覧において特徴的な点といえる「童舞」についてである。

なお後述するように10冊からなる『舞楽留』は、その記載事項の年代は200年余りと広範囲で、記載事項に関してもその情報量が多いため、本稿では前半部分である5冊分の明暦四(1658)年から寛政二(1790)年の132年間を研究対象とする。

2. 『舞楽留』について

『舞楽留』²⁾は東京国立博物館所蔵の5冊ずつからなる2つの史料で、袋綴によって装丁された書写本である。ただしこの計10冊の史料は、その記載内容から連続する10冊と考えられるため、本稿では全10冊とし、以下に示すように記載事項の年代が早いものから第一冊とした。

この資料については不明な点がとても多いが、史料から読み取れる情報として、記述に関わった人物が3名であることがあげられる。その3名とは、太秦姓東儀本家の東儀文暉（安永六(1777)年～天保十四(1843)年）とその実子である東儀文静（文政七(1824)年～明治四(1871)年）、そして、文静が生まれるまで文暉の養子であった東儀文均（文化八(1811)年～明治六(1873)年）の3名である³⁾。

しかし記載事項の年代は、文暉の生まれる120年近く前の明暦四(1658)年から始まっているため、文暉と文均による両者が生まれる前の記録の書写と、文暉自身が関わった舞楽演奏の記録の記述、そしてそれを文静が受け継ぎ記述した文献といえる。なぜなら第一冊から第九冊は、表紙に「文暉書」または「文暉記」と記され、第九冊と第十冊は、表紙に「文静記」と記されていることから文暉と文静によって記されたと考えられるからであり、また第四冊と第五冊の末尾には「文均写之」という記述が見られることから、文均も関わったと考えられるからである。以上、記載事項の年代・記述に関わった人名をまとめると以下のとおりになる。

第一冊	明暦四 (1658)年～正徳元(1711)年	東儀文暉	
第二冊	正徳二 (1712)年～享保十(1725)年	東儀文暉	
第三冊	享保十一(1726)年～宝暦四(1754)年	東儀文暉	
第四冊	宝暦五 (1755)年～明和九(1772)年	東儀文暉	東儀文均
第五冊	安永二 (1773)年～寛政二(1790)年	東儀文暉	東儀文均
第六冊	寛政三 (1791)年～文化六(1809)年	東儀文暉	
第七冊	文化七 (1810)年～文政五(1822)年	東儀文暉	
第八冊	文政六 (1823)年～天保六(1835)年	東儀文暉	
第九冊	天保七 (1836)年～安政元(1854)年	東儀文暉	東儀文静
第十冊	安政二 (1855)年～明治二(1869)年	東儀文静	

次に、全10冊における記載事項をまとめると次のとおりである。記載事項は、文暉の4代前の東儀兼益から文暉・文静に続く太秦姓東儀本家の楽人が出仕した舞楽演奏についての記録と捉えることができる。ただし第一冊の最初の2年間（明暦四(1658)年と万治二(1659)年）において、太秦姓東儀本家の人物名は記載されていない。記載されている人名は2年間とも〈納曾利〉の舞人のみで、実の兄弟である林広為と東儀兼伴の名が記載されているのみである。

その出仕先は、宮中関連では年中行事である元日節会・踏歌節会・舞御覧や仙洞御所などでの臨時舞楽、寺社関連では各宗派における遠忌や遷宮に際しての舞楽、幕府関連では江戸や日光に下向して行われた舞楽、そして鷹司家など個人宅での舞楽など、公的な場から私的な場まで多岐にわたっている。またその地理的行動範囲は京がほとんどであり、遠方の例としては、先述の江戸・日光のほか高野山の麓にある天野社への出仕があげられる。

また各記載事項の内容は以下の5項目、1. 演奏が行われた年月日、2. 催し名や場所、3. 演奏された楽曲名、4. 各楽曲ごとの舞人名、5. 各楽器ごとの楽人名である。

ここで特徴的な点をあげると以下のとおりである。まず第一に、舞人・楽人共に人名は「文暉」のように名だけで、姓が書かれることがほとんどない点である。なお姓が書かれている場合は、『舞楽留』において初出の場合や、中・乾・喜多など「南都右方人」と呼ばれる家の楽人の場合である。なお名で呼び合うという点は、現在の宮内庁楽部にも通じる点であり興味深い。第二に、楽人・舞人は養子に入った時や新しく任官された時などに改名を重ねることが多いが、『舞楽留』における人名は、その時点その時点での名が記載されており、ある種の臨場感が感じられる点である。第三に、楽人は管方だけでなく打物も2行に分けて書かれ、左方と右方に分かれて担当していたことが分かる点である。第四に、楽人に関して事前に決まっていた人名と当日代行して演奏した人名の両方が、併記されている部分があった点である。

3. 舞御覧について

舞御覧について言及された文献は、管見によるとほとんどない状況にあるようだが、江戸期に安倍季尚による雅楽全般について書かれた『楽家録』では、巻之四十三と巻之四十七に舞御覧について書かれ、以下のことが分かった⁴⁾。

1. 『舞楽留』における舞御覧は、『楽家録』において「年始舞御覧」にあたる。
2. この「年始舞御覧」は、宮中の年中行事の1つである。
3. 舞御覧とは、天皇が御簾の中から舞楽を御覧になるもので、そのため『舞楽留』では舞御覧についての記述では、「舞 御覧」というように「舞」と「御覧」の間に闕字が入っていると考えられる。
4. 開催日は、踏歌節会の翌日である、正月17日に例年行われる。
5. 行われる場所は、内裏の清涼殿の南にある櫻の庭と呼ばれるところである。
6. 舞楽の前に舞台上では、「鶴包丁」という儀式が行われる。
7. 舞楽の曲目は、特に決まっていない。
8. 全体の流れはまず左右同音による集会乱声、次に〈振鈴〉三節の後、舞楽が五番または七番行われ、最期に左右同音による〈長慶子〉が退出音声として奏される。
9. 舞台は、おおむね敷舞台が用いられ、途中で雨が降り出した時は軒廊で行う。
10. 朝から雨の場合は、日延べをする。

また、巻之四十七には舞台や楽屋の設え方、そして舞楽目録の書き方が詳細に解説されている。

この他に先行研究としては、塚原康子による明治期に記録された幕末の宮中行事についての史料である『公事録』に記述された舞御覧についての記述がある〔塚原1996〕。

以上は演奏する側からみた舞御覧についてのことである。一方、この舞御覧を見る側からの記録としては、小野将による下橋敬長の著書『幕末の宮廷』において、「...正月十九日の「舞御覧」儀式にあたっては、肩衣（袴の上衣）さえ着ければ、「人民一般」でも拝観できるのだった。」〔小野2000：297〕ということがあげられている。つまり、この「舞御覧」は、一般にも開放され見物

することができたものであったことが分かる。

ただしここで注意しなければならない点がある。『楽家録』は元禄三(1690)年に成立したことから、この舞御覧は『舞楽留』第一冊の記載時期に当てはまり、本稿の研究対象と時期が重なるが、この下橋という舞御覧は開催日から判断すると正月19日ということから、舞御覧が正月19日に行われるようになった寛政三(1791)年以降と判断でき、これは『舞楽留』第六冊以降に当てはまる。つまり、両者には時間のずれが生じており、舞御覧の一般開放が当初から行われていたかを前述の文献から判断することはできない点である。したがって一般開放が当初からではなく、ある時期、少なくとも第六冊以降の記載年代から行われていたとするならば、第五冊までを研究対象とする本稿の調査範囲を外れてしまう点もあげられる。

4. 舞御覧の全体像

4-1. 開催年月日

まず舞御覧が行われる日にちは前述した『楽家録』に書かれているように、基本的には正月16日に行われる踏歌節会の翌日、正月17日である。ただし例外もあり、中御門天皇の時代(1709-1735年)には1月18日に行われ、桜町天皇の時代(1736-1747年)には2月3日あるいは4日に舞御覧を行っている。後者の場合についてはその理由として、正月が桜町天皇の母親の忌月にあたるため、1月を避け2月になったことが、『舞楽留』に書かれている⁵⁾。また舞御覧は毎年行われるものであり、第一冊から第五冊における132年間で舞御覧についての記述は106年分であり、記述のない部分は26年分である。なおこの記述がない部分の内、元禄三(1690)年から同七(1694)年の5年間については、原文において「有別帳」と書かれている[『舞楽留』第一冊:26枚目]。これには、様々な理由から行うことができない場合があったと推測できる。例えば、開催場所である内裏が火災にあった場合(1661年、1673年、1709年、1788年)、その翌年以降、新しい内裏ができるまで舞御覧を行うことができないと推測される。また後水尾天皇と東山天皇以降の天皇や上皇が崩御された場合、その翌年(1681年、1710年、1738年、1751年、1763年、1780年)は喪に服しているため舞御覧は行われなかったと考えられる。その他にも『舞楽留』を書写した東儀文暉・文静自身が舞御覧に出仕しなかった場合、その記録は記述されないという可能性も考えられる。

4-2. 演奏曲目

舞御覧で演奏された曲目については表1に示したとおりであり、特徴的なことをまとめると以下のとおりである。

1. 〈振鈴〉を除き左舞30曲、右舞23曲、さらに〈東遊〉が行われていた。そして左舞30曲の内4曲は、現在の宮内庁楽部の演奏レパートリーである『明治撰定譜』収載楽曲から外れてしまったいわゆる廃絶曲とされる〈三臺塩〉〈感城楽〉〈採桑老〉〈賀王恩〉である。一方『明治撰定譜』に含まれている楽曲だが、舞御覧で演奏されなかった曲目として、左舞では4曲〈輪臺〉〈青海

波〉〈蘇莫者〉〈左方・還城楽〉があり、右舞でも4曲〈埴破〉〈進蘇利古〉〈進走禿〉〈右方・抜頭〉があげられる。なお〈還城楽〉と〈抜頭〉に関して、舞御覧では常に〈還城楽〉は右方のものを、〈抜頭〉は左方のものが行われているため、事前の取り決めがあったのではないかと推測される。

2. 「番舞」と呼ばれる左方・右方の組み合わせに関しては、『教訓抄』『体源鈔』『楽家録』において示されている組み合わせの他に、変化に富んだ様々な組み合わせは表2のとおりに見られた⁶⁾。注目すべき点をあげると、番舞が1対1のものが7例、また複数の番舞を持つものの中で、前述の3冊の楽書に共通して提示された番舞が最頻値であるものが7例が見られた。なおその他に13例があげられる。これらは、前述の3種の楽書に共通して提示された番舞が最頻値ではなかったものと、楽書では番舞がないとされているものである。また、最も多くの番舞をもったものは〈五常楽〉で12種の舞を番舞とし、最頻値のものは〈皇仁庭〉であった。ただし、これは楽書3種に共通して提示された〈登殿楽〉とは異なっている。
3. 曲目数は通常、七番つまり14曲の舞楽に〈振鈴〉三節と〈長慶子〉が行われていた⁷⁾。しかし、享保十七(1732)年から徐々に七番から五番に減少し、宝暦十四(1764)年から天明三(1783)年の間は五番となっていた。しかし天明五(1785)年からは再び七番になっているため、完全な小規模化と断定することはできないだろう。
4. 右舞のみで、左舞が行われない場合が、調査対象内の初期において7回(寛文五(1665)年、寛文六(1666)年、寛文九(1669)年、寛文十(1670)年、延宝八(1680)年、貞享四(1687)年、元禄二(1689)年)見られた。この場合、出仕する楽人・舞人は京都方と天王寺方であり、左舞の舞人を担当する南都方は管方の楽人も、一部の例外を除いて出仕していない。その例外とは、右舞〈胡徳楽〉における「勸盃」や場合によって「瓶子取」においてである。ただし〈胡徳楽〉の「勸盃」は、南都方が担当することが慣例となっているためではないかと思われる。このことから、右舞のみという場合は、何らかの事情で南都方が出仕できなかった場合ではないかと推測される。
5. 左舞右舞には分類されず、現在では国風歌舞と分類される〈東遊〉が行われた例が4回(延宝六(1678)年、天和三(1683)年、明和二(1765)年、安永四(1775)年)見られた。この〈東遊〉が行われた時期は、一般に日本音楽史において〈東遊〉の再興が始まった元禄七(1694)年以前であり、石清水臨時祭の再興に際して〈東遊一具〉の再興が完成する文化十(1813)年以前である。またこれら4回の〈東遊〉での配役は、歌方の拍子に京都方の多家が担当する他、4人の舞人と付物の箏・笛は南都方が担当していた。このことから、〈東遊〉の伝承が京都方では再興が必要な状態であった一方で、南都方ではその伝承が残っていたと推測される。したがって『舞楽留』という史料から、従来の日本音楽史における〈東遊〉はあくまでも京都方についてのことであり、〈東遊〉全般について捉え直す必要があるといえる。
6. 舞人の人数に関して、通常より大規模になる場合と小規模になる場合の両者が見られた。大規模になる例としては、通常四人舞である平舞において六人舞になる場合や〈蘇利古〉において

は五人舞になることもあり、享保二十(1735)年には〈萬歳楽〉〈延喜楽〉で八人舞が行われている。その一方で小規模になる例として、平舞において二人舞となる場合があげられる。また、通常の形式とは異なり、舞には直接関わらないが従者のような「番子」と呼ばれる二人を従えて登場する形式による舞楽が〈散手〉と〈貴徳〉に見られ、享保三(1718)年から宝暦二(1752)年の間に〈散手〉3回・〈貴徳〉9回の計12回が行われた。

7. 楽曲においても大規模になる場合が見られ、〈萬歳楽〉では楽曲全体を2回繰り返す「甘拍子」という例が4回、宝永二(1705)年から延享二(1745)の間に見られた。

4-3. 出仕した楽人・舞人

出仕した楽人・舞人についての調査方法としては、第2章で先述したように『舞楽留』における人名には姓が書かれていないため、まず『地下家伝』における楽人の生没年などの記述と照合し、『地下家伝』に記載されていない人名に関しては平出久雄による楽家の系譜[平出1989]を用いて姓名を特定した。その結果『舞楽留』第一冊から第五冊において、出仕した楽人・舞人は376名で、その内訳は、京都方(楽家の多・山井・安倍・豊原)が108名、南都方(楽家の上・辻・芝・奥・東・窪・久保と、南都右方人の西・井上を除く中・喜多・西京・乾・新と、寺侍の藤井・後藤)が119名、天王寺方(楽家の菌・林・太秦姓東儀・安倍姓東儀・岡)が123名、調査において姓を特定できなかった人物が36名であった。

三管と打物における楽人に関しては、左方は南都方と京都方が、右方は天王寺方と京都方が担当していた。また各管は、概ね四管立から六管立で行われていた。

舞人に関しては、左方は南都方が、右方は天王寺方を中心に京都方とが担当していた。ただし例外的なものとして次の4曲があげられる。〈採桑老〉は左舞であるが天王寺方によって、〈胡飲酒〉も左舞であるが京都方の多家によって行われ、先述したように〈東遊〉は南都方と京都方によって、〈胡徳楽〉は三方によって行われていた。また〈二舞〉は、南都方の寺侍であり、他の楽家と比べて低い身分藤井家・後藤家が担当していた。さらに注目すべき点として、1回の舞御覧で1人が担当する舞は複数曲であり、2～4曲を担当していた点である。

5. 舞御覧における童舞

舞御覧における特徴的な点として、「童舞」があげられる。これは子供が舞人として舞を行うもので、前述の3冊の楽書では、童舞に用いられる楽曲が示されている⁸⁾。しかし、その実態、例えば具体的な年齢や実際舞われた楽曲について、管見によれば研究があまり行われていない。そこで、本章では舞御覧における童舞の実態についての調査を行った。

『舞楽留』において、童舞の場合、楽曲名の右上に「童舞」と小字で書かれている。しかし、「童舞」と明記されていない場合でも、舞人名において、例えば「(辻) 高元」の右上に小字で「辻千之介」のように幼名が書かれている場合もある。したがって本稿の調査では、1. 楽曲名に童舞と

記されている場合、2. 舞人名に幼名が記されている場合、3. 一般的に童舞で行われる楽曲の〈迦陵頻〉（胡蝶）、4. 一人の舞人による走舞、以上の場合に該当する者において、その名が記載されている前年・後年における各舞人の年齢を調べた。

その調査結果は表3のとおりであり、研究対象の舞御覧106回の内54回に童舞が行われ、上記に該当する者は延人数で215名（左舞では101名、右舞では114名）であることが分かった。そして特徴的なことをまとめると、以下のとおりである。

1. 年齢に関して、左舞右舞ともにその年齢は6～16歳であり、平均年齢は9.9歳であった。なお、6歳による舞は、〈迦陵頻〉の4人の内の1人である場合と、〈納曽利〉の2人の内の1人である場合であった。
2. 演奏曲目に関しては、左舞では〈迦陵頻〉〈萬歳楽〉〈甘州〉〈桃李花〉〈東遊〉〈陵王〉〈散手〉〈抜頭〉の8曲（平舞が4曲、走舞が3曲）であり、右舞では〈胡蝶〉〈登殿楽〉〈蘇利古〉〈長保楽〉〈納曽利、または落蹲〉〈貴徳〉〈還城楽〉の8曲（平舞が4曲、走舞が3曲）であった。また先述したように童舞とされる〈迦陵頻〉・〈胡蝶〉がそれぞれ12回と14回と行われる回数が最も多く、次いで1人よって舞われる〈陵王〉・〈落蹲〉が、それぞれ20回と18回と多く行われていた。
3. 同じ楽曲でありながら、舞人の人数が2人と1人で名称の異なる〈納曽利〉と〈落蹲〉に関して、童舞においては、〈落蹲〉の方が〈納曽利〉よりも行われる回数が多く、〈落蹲〉18回、〈納曽利〉4回であった。また舞人の年齢における最頻値は〈落蹲〉では11歳、〈納曽利〉では13歳、14歳となっている。ちなみに童舞による〈陵王〉の舞人の年齢における最頻値は8歳と11歳である。以上のことから、先述の〈陵王〉〈落蹲〉の演奏回数も含め、4人または2人による舞よりも1人で舞うものの方が、10歳前くらいの低年齢の子供に向いているのではないかと考えられる。
4. 童舞による演奏曲目の中で最も注目すべき点は、〈東遊〉が童舞によって行われていたという点である。これは、舞人の年齢を調査したところその年齢が4回とも7歳～15歳で、平均年齢は10.3歳となっていたため、童舞と判断したことが根拠である。なお、歌方の拍子と笛・箏の付物は26歳～64歳の大人であった。

6. 結

以上、『舞楽留』における舞御覧の記述についてみていくことにより、一つの楽家における出仕記録から、明暦四(1658)年から寛政二(1790)年の132年間において行われた江戸期の雅楽、特に舞楽は、実に豊かで充実したものだったといえるのではないだろうか。舞御覧での演奏曲目から、今日でも伝承されている楽曲である〈輪臺〉〈青海波〉〈埴破〉などが演奏されなかったことは多いに不可解であり、その理由は本稿の調査からは分らなかった。しかしそのことを除き、ほぼ舞楽のレパートリーといえるものを網羅的に行っていた実態が分かった。そして、舞楽をただ稽古におい

て伝承するのではなく、演奏の場という実践の場が存在したということ、またそのような場を今日でいうところの小学生の年齢から経験していくということ、さらに管方はほぼ丸一日吹き続け、舞人は数曲を舞うといった体力的なことなど様々が視点から、楽と舞をしっかりと身につけ伝承していく姿勢が読み取れた。

また、応仁の乱により京での雅楽が衰退したことにより、それまで宮中で演奏することのなかった楽家において、毎年宮中にて天皇の御前で舞を舞い楽を奏することはとても名誉なことであり、江戸期の舞御覧というものは、実は雅楽史上とても画期的なできごとだったといえるのではないだろうか。一般に衰退した時代といわれていた江戸期の雅楽は、実は新たな発展を遂げた時代で、まさに「第二の盛期」[遠藤2004: 46]であり、舞御覧はその実態を提示しているものといえるだろう。

今後は残りの5冊についても同様の調査をし、さらに細かく分析していきたい。そして各楽家に伝わる日記などを読み解くことにより、江戸期の雅楽がどのようなものであったか解明していきたいと思う。

[注]

- 1) 本稿では楽曲名は〈 〉を使って示すこととする。
- 2) 舞楽留の読みについて史料には何も書かれていない。国文学研究資料館のデータベースでは「ぶがく」となっている(参考文献のWEBサイトを参照)。
- 3) 文均の養子離縁については[平出1989: 33付表+系図]による。
- 4) 『楽家録』『年始舞御覧』巻之四十三・年中奏楽・第九: 1436, 「年始舞御覧附楽屋等図」巻之四十七・旧例・第六: 1546-1549, 「鶴包丁之事」巻之四十七・旧例・第六: 1550。
- 5) 原文は以下のとおりである。「但正月ハ御母御忌月依之二月成ル」『舞楽留』第三冊: 25枚目]
- 6) 『教訓抄』『舞番様』巻第七: 140-143, 『体源鈔』『舞番様』第九巻: 996-1001, 『楽家録』『番舞』巻之三十六・番舞: 1147-1158。
- 7) ただし調査対象の初期には、(振鈴)の後、左舞・右舞の前に〈一曲〉が行われた例が4回(万治三(1660)年、寛文六(1666)年、延宝四(1676)年、延宝五(1677)年)見られる。
- 8) 『教訓抄』『舞姿法・童舞』巻第七: 136, 『体源鈔』『舞姿法・童舞』第九巻: 989, 『楽家録』『童舞之目録』巻之三十七・舞第四: 1166-1167。

[参考文献] (著者名のアルファベット順)

安倍, 季尚 (撰)

元禄三(1690)年 (撰) 『楽家録』

[翻刻] 1935-1936 正宗, 敦夫 (編纂・校訂) 『楽家録 四』『楽家録 五』日本古典全集, 東京: 日本古典全集刊行会。

1977（復刻版）正宗，敦夫（編纂・校訂）『楽家録 四』『楽家録 五』覆刻・日本古典全集、
東京：現代思潮社

2007（オンデマンド版）東京：現代思潮新社

遠藤，徹（構成）

2004 『別冊太陽 雅楽』東京：平凡社

芸能史研究会（編）

1970 『雅楽—王朝の宮廷芸能—』日本の古典芸能2 東京：平凡社

平出，久雄（編）

1989 「日本雅楽相承系譜（楽家篇）」in 平野，健次；他（共監）1989『日本音楽大事典』東京：平凡社；付表+系図12-33

吉川，英史

1965 『日本音楽の歴史』大阪：創元社

国文学研究資料館（電子資料館・書誌目録データベース・日本古典籍総合目録）

(<http://base1.nijl.ac.jp/~tkoten/about.html>), 2008年10月5日アクセス.

狛，近真

天福元(1233)年頃成立 『教訓抄』

〔翻刻〕1973 「教訓抄」植木，行宣（校注）『古代中世芸術論』日本思想大系23，林屋，辰三郎（校注）東京：岩波書店：9-215.

三上，景文

弘化元(1844)年成立 『地下家伝』

〔翻刻〕1937 正宗，敦夫（編纂・校訂）『地下家伝 二』日本古典全集，東京：日本古典全集刊行会.

1978（復刻版）正宗，敦夫（編纂・校訂）『地下家伝 二』十～十三 覆刻・日本古典全集，
東京：現代思潮新社：456-703.

小野，将

2000 「国学者」in 横川，冬彦（編）『芸能・文化の世界』シリーズ近世の身分的周縁2 東京：吉川弘文館 275-309.

芝，祐靖（監）；遠藤，徹；他（共著）

2006 『図説 雅楽入門事典』東京：柏書房.

東儀，文暉；東儀，文均；東儀，文静（書写・著）

明暦四(1658)年～明治二(1869)年 『舞楽留』全10冊（写本），東京国立博物館蔵.

豊原，統秋（撰）

永正八(1511)年～永正九（1512）年（撰） 『体源鈔』

〔翻刻〕1933 正宗，敦夫（編纂・校訂）『体源鈔 三』日本古典全集，東京：日本古典全集刊行会.

1978 (復刻版) 正宗 敦夫 (編纂・校訂) 『体源鈔 三』覆刻・日本古典全集, 東京: 現代思潮社

2006 (オンデマンド版) 東京: 現代思潮新社

塚原, 康子

1996 「幕末の宮中行事における雅楽—『公事録』を手がかりに—」『昭和音楽大学研究紀要』15: 1-16.

米田, 雄介 (編)

2003 『歴代天皇・年号事典』東京: 吉川弘文館.

謝辞 本稿における『舞楽留』の紹介とマイクロフィルムの紙焼きの提供は遠藤徹氏によるものであり、ここに厚く感謝申し上げたい。

しみず よしこ

お茶の水女子大学大学院博士後期課程単位取得満期退学。現在、国立歴史民俗博物館共同研究員。

[illegible]

凡例
現行曲の略、
『明治制定集』に収載されている
調、
「明治制定集」に収載されていない
調、
左：右方調の略、
右：右方調の略、
毛：平、仄、實、疑、太、普通、平調、
高、平調、低、平調、太、平調、太、平調、
高、平調、高、平調、高、平調、
楽曲名：無調歌での演奏回数、
楽曲名：異調歌での演奏回数、
合計：大人にも演奏（演奏でない場合）と
重畳の重畳の合計、
楽曲名：退：退出音の略、
回数における空欄：0回を示す
回数における空白の部分：本文中に
おける注目箇所。

表2 舞御覧における番舞に関するデータ (作成:清水淑子)

左舞	右舞	回数	種類	左舞	右舞	回数	種類	左舞	右舞	回数	種類	左舞	右舞	回数	種類	左舞	右舞	回数	種類	
東遊	蘇利古	4	4	1/1	五常楽	綾切	1	22	2/12	春賀鳴	新島舞	5	5	1/3	萬歳楽	○	延喜楽	33	46	5/8
安摩	○ 蘇利古	3	33	2/3		皇仁座	5			○ × 退走亮	0						皇仁座	3		
	二舞	30				胡蝶楽	2			○ × 古鳥舞	0						地久	1		
	× 新舞踊	0				古鳥舞	2				綾切	2	14	4/4			長保楽	8		
登殿	○ 蘇利古	12	12	1/2		数手	1				数手	3					林歌	1		
	× 八仙	0				地久	1				長保楽	1					× 新島舞	0		
賀王恩	皇仁座	4	6	3/3		長保楽	1			○	仁和座	8					× 綾切	0		
	長保楽	1				○ 登殿楽	3			蘇合香	古鳥舞	2	3	2/4			× 石川	0		
	登殿楽	1				仁和座	1				退走亮	1					皇仁座	1	3	2/4
賀殿	延喜楽	1	26	3/6		八仙	2			○ × 退走亮	0						○ 地久	2		
	地久	9				白濱	2			× 新島舞	0						× 白濱	0		
	○ 長保楽	16				林歌	1			太平楽	皇仁座	1	98	6/10			× 白濱	0		
	× 古鳥舞	0				胡飲酒	○	林歌	2	2	1/2						綾切	1	8	7/8
	× 白濱	0				× 新舞踊	0				胡蝶楽	7					皇仁座	1		
	× 林歌	0				探桑老	○	胡蝶楽	2	10	3/5						数手	2		
養頭楽	○ 数手	4	8	3/3		○ 新舞踊	7				○ 拍持	12					新舞踊	1		
	登殿楽	2				退走亮	1				八仙	10					長保楽	1		
	仁和座	2				× 綾切	0				林歌	2					登殿楽	1		
迦陵頻	○ 胡蝶	13	13	1/1		× 林歌	0				陪膳右	40					仁和座	1		
甘州	綾切	1	22	5/8		○ 貴徳	45	45	1/1		× 園舞楽	0					○ 郭志	0		
	数手	2				三臺壇	皇仁座	1	6	4/5		× 長保楽	0				○ 納管利	79	99	1/1
	登殿楽	4					古鳥舞	1			打時楽	拍持	28	31	3/5		落障	20		
	仁和座	3					退走亮	2				新舞踊	1							
	○ 林歌	12					長保楽	2				林歌	2							
	× 拍持	0					× 園舞楽	0			○ 燈籠	0								
	× 園舞楽	0					○ 皇仁座	2	11	5/5		桃幸花	○							
	× 石川	0					胡蝶楽	1				新舞踊	2							
感城楽	○ 綾切	1	4	4/4			古鳥舞	3				登殿楽	2							
	延喜楽	1					数手	1				仁和座	4							
	数手	1					新舞踊	1				林歌	1							
	新舞踊	1					白濱	6			抜頭左	遠城楽右	45	45	1/5					
喜春楽	綾切	1	26	7/10			林歌	3			○	× 八仙	0							
	皇仁座	2					× 拍持	0				× 新舞踊	0							
	古鳥舞	2					綾切	2				× 林歌	0							
	数手	2					新舞踊	1				× 納管利	0							
	長保楽	1					仁和座	1			北庭楽	綾切	2	10	5/6					
	仁和座	1					八仙	1				新舞踊	2							
	○ 白濱	17					白濱	3				登殿楽	4							
	× 地久	0					× 林歌	0				皇殿楽	1							
	× 延喜楽	0					× 遠城楽右	0				仁和座	1							
	× 林歌	0					× 石川	0				○ 八仙	1							
												× 林歌	0							

凡例

○: 『教訓抄』・『体源抄』・『家業集』に共通して提示された組み合わせ

×: 『教訓抄』・『体源抄』・『家業集』において記載されているが、舞舞覧では出現しなかった組み合わせ

凡例
○: 『教訓抄』『体源抄』『家範』
に共通して提示された組み
合わせ
×: 『教訓抄』『体源抄』『家範』
において記載されているが、
舞御覧では出現しなかった
組み合わせ

表3 舞御覧における童舞に関するデータ (作成:清水淑子)

分類	楽曲名	回数	頻度	人数	(左右別)	平均年齢	(左右別)
左舞	平舞 迦陵頻	12	92%	42	101	9.9	10.2
	平舞 萬歳楽	1	2%	4		9.5	
	平舞 甘州	1	4%	4		12.5	
	平舞 桃幸花	1	9%	4		13.0	
	一 東遊	4	100%	16		10.3	
	走舞 陵王	20	20%	21		10.0	
	走舞 散手	5	11%	5		11.6	
	走舞 抜頭左	5	11%	5		9.6	
右舞	平舞 胡蝶	14	93%	50	114	9.9	9.6
	平舞 登殿楽	2	10%	8		6.1	
	平舞 蘇利古	2	10%	9		9.2	
	平舞 長保楽	1	3%	4		8.0	
	走舞 納管利	4	5%	8		11.1	
	走舞 落障	18	82%	19		8.0	
	走舞 貴徳	5	11%	5		11.6	
	走舞 遠城楽右	10	20%	11		12.7	
全体		105	7%	215		9.9	